

高校生WEEKLY 高校生ウィークリー

一宮高(愛知県一宮市)の被服科が53年の歴史に区切りをつけ、来年4月から「ファッション創造科」に完全に切り替わる。被服科は現在、県内の高校では唯一の存在で、最後の3年生36人は来年2月に開くファッションショーに向け「先輩たちに負けなようなステージにしたい」と裁縫作業に熱を入れている。

(一宮総局・三輪喜人)



3年間の集大成となるファッションショーに向け、打ち掛けを仕立てる杉山さん(左)と非常勤講師の三宅さん＝愛知県一宮市の一宮高校で

一宮高被服科最後の36人

サヨナラの代わりに 晴れ姿

被服科は一九五九(昭和三十一年)年、同校の家庭科を改称してスタート。一宮市は繊維産業が盛んな土地柄で、多くの卒業生を輩出して地場産業を支えてきた。三年生で和裁と洋裁のコースに分かれ、今は各十八人が在籍している。十二月月上旬の夕方、校舎四階の和裁室。被服科和裁コースの杉山幸さん(二)は、鶴の刺しゅうが入ったきらびやかな生地を一針、一針丁寧に縫い、花嫁衣装「打ち掛け」に仕立てていた。「生地が分厚いので、長い時間やっている」と、握力がないと笑う。ほかの三年生たちも授業後に残り、訪問着や振り袖など自らデザインした卒業制作に取り組む。生地選び

伝統背負い3年生ショー 愛知で2月

が不思議。みんなで話をしながら、作業をする光景は、私のころ何とも変わっていない」と懐かしむ。「被服科の魅力は、十代のころから着物文化とふれあえること。自分で作り、着付けもできるなんて、普通の高校生では得られない経験ですから」と話す。全国の高校生が対象の「さももの作品コンテスト」で、最優秀賞を毎年このように受賞するなど同科の実力はトップレベル。卒業生でもある被服科担任大下みゆき教諭(四)は「作る量も多く、質も高い」と胸を張る。

打ち掛けやドレスなど145点

被服科OGの三宅さんは「母校で先生と呼ばれるのには感謝。みんなで話をしながら、作業をする光景は、私のころ何とも変わっていない」と懐かしむ。「被服科の魅力は、十代のころから着物文化とふれあえること。自分で作り、着付けもできるなんて、普通の高校生では得られない経験ですから」と話す。全国の高校生が対象の「さももの作品コンテスト」で、最優秀賞を毎年このように受賞するなど同科の実力はトップレベル。卒業生でもある被服科担任大下みゆき教諭(四)は「作る量も多く、質も高い」と胸を張る。

晴れ姿

に受賞するなど同科の実力はトップレベル。卒業生でもある被服科担任大下みゆき教諭(四)は「作る量も多く、質も高い」と胸を張る。

で、一宮市若竹三のアイブラザ一宮で開かれる。テーマは物事の最後を意味する「エピソード」。

ショーには、和裁、洋裁の両コースの生徒が制作した打ち掛け、振り袖、ウェディングドレス、ニットドレスなど計百四十五点が出品される。モデルは生徒自身が務め、照明などの演出も生徒が考える。リストを

は「裁縫も学べるので、保育士になったときにいろいろなおもちゃが作れる」と話す。

被服科三年生によるファッションショーは来年一月四日午後一時半から三時まで

真剣10代ざぼり場

須賀原洋行



この記事・写真等は中日新聞社の承諾を得て転載しています。

中日新聞

発行所 中日新聞社
名古屋市中区三の丸一丁目6番1号
〒460-8511 電話 052(201)8811